

美容整形ブームの憂うべき背景

(2011年8月)

column5

北陸大学東アジア総合研究所所長
叶 秋男

もう数年前のことだが、後期の始まりとともに顔を合わせた一人の中国人留学生の変貌ぶりに驚かされたことがある。明らかに彼女の顔面には化粧によるものでない変化が見て取れたのである。その学生はあっけらかんと「ちょっとプチ整形してみました」と言う。それを聞いた筆者は、日本に来て「美容に目覚めた」学生が整形にも手を出したのかと、「先進国への留学による文化的影響」と受け止めた。しかしながら、爾来そうした出来事はたちまち珍しいものではなくなった。そして今年8月19日付の人民網日本語版には、「夏休みの大学生と言えば、これまでは旅行やアルバイトに精を出すのが常だったが、現在では連れ立って整形に出かける学生が少なくない。夏休みに入って以来、各地の整形医院では患者（原文のまま）が急増しているが、大学生や高校生がその大半を占めている」との記事が掲載された。中国における昨今の美容整形ブームはイデオロギー的束縛の緩和が女性たちに元来の美意識を目覚めさせた結果といえるのだろうか。

確かに、美容整形の起原はアジアとの伝承がある。およそ2800年前に形成外科の達人スシュルタが鼻や唇の形成術を施したという記録はあるが、近代的な形成外科は西洋で19世紀半ばに始まり、皮肉にも、頻繁に発生する戦争と傷病者の増加とともに飛躍的な技術的發展を遂げた。第二次世界大戦後、こうして培われた技術が女性の美容整形ニーズを作り出すことになった。ただ、一般的には、そうしたニーズは高学歴層、まして大学生には無縁のものと受けとめられてきた。では、何故多くの中国人女子学生が美容整形に走るのか。この社会現象を理解するには、先行例の韓国を見ると良い。

国際美容整形外科協会（ISAPS）の2009年統計によれば、人口1万人当たりの美容整形手術件数の最も多い国はハンガリー、次いで韓国、ブラジルと続く。ただし外国人の被手術者を差し引くと、韓国が最多と考えられる。確かに韓国の街中では美容整形の看板が目につく。その理由を民族の美容観に帰着させるのは単純すぎる。というのも、美容整形は少なくとも二世代前の人々には考えもつかなかったことなから。したがって整形ブームは近年の社会的変化から考えられるべきで、それには3つの要因が作用している。

1つ目は、進展するグローバル化の下にある開発途上国として激しい競争心が社会心理と化していることである。2つ目は大学進学率の上昇と大卒需給のアンバランスである。今日韓国の大学進学率は82%とOECD諸国中首位だが、問題は卒業生が就職を望む業種では産業の高度化により大卒の需要は供給を上回らなくなってきた。このため大学生の就活は厳しさを増し、容姿も重要な要素と考えられるようになった。3つ目は、グローバルメディアが創出するビューティー・スタンダードの浸透である。ファッションや芸能分野などで欧米の容姿基準が商品性の高いものとして打ち出されており、その基準を受容するアジア社会の中ではグローバル企業・市場受けするために素顔を物理的に変形することが得策となる。

東アジア諸国での美容整形ブームは、厳しい競争環境の下でなんとしてもチャンスを掴もうとする女子学生たちの逞しい行動なのであろうが、複雑な思いに駆られる。